

## 台湾から静岡、東京での新生活

東京都 加藤 シズエ

昭和を終わり、平成も早や三年を迎えようとしています。じっと目を閉じて、過ぎにし四十五年を振り返る時、誰もが経験したあの戦争の苦しかった生活今の幸福を感じずにはられません。

昭和二十一年三月、家族六人、小雪のちらつく鹿児島港に上陸、リュック一つの中に、だいじに持ち帰った一升の砂糖を、船の荷降ろしの人に袋を切り盗られ、悲しい思いをしました。が、今や、店頭に並ぶ砂糖に、世の人は興味を特別に持たず、世の中は変わったのだとつくづく思う今日此の頃です。

父母の故里、静岡県沼津で、鹿児島を後に、長い長い旅でした。「内地の人はみんな親切よ」の母の言葉は、台湾の新竹州の生まれの私は、理解できなかった。しかし、今にして思えば、母が若くして父と結婚した昭和の初

期、台湾の生活が始まる前の内地での経験の結果生まれた言葉だったのでしょう。終戦後の内地居住者には、母の説明するような面影は、なかなか身受けられませんでした。

私たち六人の引揚げ者は、わずかな荷物を持って、こちらの親戚、こちらの親戚とたずね歩く姿は、まったくジブシーのようで、私達は、招かれざる客であったのでしょう。たしかに母方や父方の多くの親戚には、六人の新参者が同居できない理由は、高等女学校を卒業し、軍飛行場に二年勤務した私は理解できました。しかし、内地人の親切さを信じていた母は心の底から寂しさを口にしていました。その母の心を慰めることもできず、母に永遠の別れを告げたのが悲しいのです。

それにしても、私達は、幸運にも間もなく沼津市のアパートにおちつくことができ、ほっとしました。

ところが、六人の家族の食料の確保で、大変な汗水を流しました。母の親戚の農家を訪ね、元気な私は、母と共に、さつまいも、かぼちゃを背負って急な坂道を降りたり登ったりしたものでした。しかし、明けても暮れて

も代用食作りに頭を痛めていた母の姿を見たとき、私は、母に対する不憐さと、私たちの不運をなげく心とで「ああ、狭い日本はいやだ、いやだ」と叫びつづけて母を困らせていました。

それは、終戦後の台湾生活は、苦しい所がありました。が、食事用の米には、不自由がなかったのに、本国では代用食が続くので、私たち家族六人は困ってしまったのですが、今思えば、代用食があれば、よいほうで、代用食にも困る人は多かったのです。

母が世を去って二十八年になります。考えてみれば、あの代用食の時代に、母は、できるかぎり、私たちに多くの食料を下さって、自分は貧しい少しの食事でがまんされたので、その結果、早く天国へ昇ってしまったのではないかと、心から母にすまなかったと思っています。苦労ばかりかけた母親は、なんの楽しみをえることもなくこの世を去りました。この平和な今、懐かしい台湾を見せて上げたかったとつくづく思うこの頃です。

私は、昭和二十二年、東京の親戚を頼って上京し、今日現在、三人の子どもと三人の孫に恵まれた家庭の一人

です。引揚げた時の母の年齢より年を取り、今、ようやく、母の心を察することができ、当時、母を苦しめた思いやりのない言行を思い浮かべ母に許しを求めている毎日です。

昭和二年三月に、台湾で生まれた私は「さうは台湾よ、またくるまでは」と心で高く歌って基隆を出発してから、再び訪れることは考えられませんでした。それなのに、女学校同窓会の関係で、二年に一回、または一年に一回、故里の実家に帰るが如く訪台して、昔懐かしい台湾の友と語ろうことができ、まったく夢のようなこの頃です。